

トルコ人の国際移住をめぐる女性／ジェンダー研究の動向

深江裕美*

Turkish International Migration Studies and Women/Gender Perspective: A Review

FUKAE Hiromi

Abstract

This essay traces the trends of Turkish international migration from the viewpoint of women/gender studies, with special reference to preceding studies on international migration between Turkey and European nations for the last four decades. Examining the contributions and the research perspectives and frameworks of the particular works between 1970 and 2010, this essay highlights the characters of the women/gender studies on Turkish international migration of each decade. In 1970's and 1980's the perspective that focuses on women's emancipation was prevalent in the literature and that seemed to be driven by the researchers' Orientalism or interest of socialistic revolution. In 1990's there was change in the research perspective thorough the shift of the research objective from the degree of women's emancipation to the gender roles, which is to avoid Orientalism. In 2000's transnationalism and gender roles that differ according to diverse Turkish political consciousnesses are adapted for the analysis, which brought the comprehension that gender is the structuring component of Turkish international migration process. However, Orientalism is still appeared in the literature if it is not directly connected to the research objective. For future research, analysis that combines the gender and other differentials such as political consciousness, religious background, ethnicity is essentially needed.

Keyword : Turkish, Europe, International migration, Gender, Orientalism

1. はじめに

本稿は、現代におけるトルコ人の国際移住に関するジェンダー軸を取り入れた人類学的研究枠組の設定に資することを目的とし、トルコ人の国際移住をめぐる女性／ジェンダー視点からの研究動向をあきらかにすることを試る。本研究で対象とするのは、1961年に政府間協定によって始められた大規模なトルコ人労働者の欧州への国際移住と、協定停止（1973年）以後も移民の社会的ネットワークを基盤に今日まで継続している個人単位の国際移住に関する研究である。

本稿では1970年－2010年の40年間に出版されたトルコ人の欧州への国際移住を対象とした主要な先行研究をレビュー対象とする¹。これら先行研究の分析枠組、視点、貢献点を吟味することによりトルコ人の国際移住をめぐる女性／ジェンダー視点からの研究動向をあきらかにしたい。

キーワード：トルコ人、欧州、国際移住、ジェンダー、オリエンタリズム

*平成21年度生 ジェンダー学際研究専攻

2. 国際移住をめぐる女性/ジェンダー研究の一般的動向

トルコ人の国際移住に関する女性/ジェンダー研究をレビューするにあたって、まず、国際移住に関する女性/ジェンダー研究の一般的動向を鳥瞰したい。

旧来、国際移住研究においては一般的に男性移民が中心的主体に想定されており、女性移民の存在は長らく注目されてこなかった。しかし、1970年代以降、女性移民の増加、1976年から1985年までの「国連女性10年」における女性移住労働者に対する国連やNGO等の活動、そして女性研究の高まりに伴って、女性移民が研究の対象に取り上げられるようになった(Hune, 1991: 804-805; Mahler and Pessar, 2006: 26)。近年は、「女性と男性、それに対応するジェンダー『役割』の比較」ではなく、「関係や状況によって異なる、ダイナミックで流動的なジェンダー概念」を用いた研究が提唱され、こうした潮流はすでに多くの成果を生んでいる(Mahler and Pessar, 2006: 27-28)。

しかし、ジェンダー概念は、いまだに国際移住研究のみならず、社会科学全般においても周辺に位置づけられているのが現状であり、女性の経験のみを対象にした研究であるのに、ジェンダー研究と冠する傾向も見受けられる(Mahler and Pessar, 2006: 28)。

このような国際移住をめぐる女性/ジェンダー研究の動向を念頭に置き、次節以降ではトルコ人の国際移住をめぐる女性/ジェンダー視点からの研究動向を詳細に検討していきたい。

3. トルコ人の欧州への移住史

トルコ人の欧州への移住は、一方で1950年代のトルコ国内の急速な人口増加、農地改革の影響による都市への人口流入、そしてそれらに連動した失業問題をpush要因とし、他方で第二次世界大戦後の経済復興途上にあつた欧州の労働力不足をpull要因としていた(Abadan-Unat, 1976: 4; Martin, 1991: 21; 森, 2006: 92)。トルコ政府はトルコ人が欧州で労働に従事し送金することによって国内の失業問題が解決することを、また、彼らが欧州で技術を習得した上で帰国することによって国内産業が発展することを期待していた(Abadan-Unat, 1976: 14, 1995: 279)。そのため、トルコは、1961年の西ドイツを皮切りに、欧州諸国と次々に労働移民の受入に関する二国間協定を結んだ(Abadan-Unat, 1995:279)²。これらの協定に基づいて、1973年までに、男性を中心とする短期契約のトルコ人労働者約79万人が、欧州に送られた(Abadan-Unat, 1976: 7)。

その後、1973年の第一次石油危機に起因する景気後退の中、西ドイツを始めとする二国間協定は欧州の協定締結国政府の申し出により停止された(Martin, 1991: 26)。各国の政府はトルコ人労働者の新規入国を拒否し帰国を奨励する一方で、希望者の継続的在留とその家族の呼び寄せは認めた(Escobar, Hailbronner, Martin and Meza, 2006: 711; Timmerman, 2006: 127)。このため、一部はトルコに帰国したが、家族呼び寄せ制度を利用した継続在留者の存在により、欧州におけるトルコ人人口は逆に増加した(Abadan-Unat, 1995: 280)。協定が停止された1973年から1980年代にかけては、欧州諸国におけるトルコ人に対する査証の導入も加わって、観光者として入国し、不法就労する者が増加した(Abadan-Unat, 1995: 280-281)。さらに、1980年代から1990年代にかけては、1980年のトルコにおける軍事クーデターとそれに続く政治不安、クルド労働者党³とトルコ軍の間の戦闘等から避難するため、庇護申請を利用する者が増加したが、戦闘が下火になるにつれて減少した(Abadan-Unat, 1995: 280-281; İçduygu and Kirişçi, 2009: 5)。

二国間協定に基づいた国際移住労働がトルコに与えた開発的効果は、積極的に評価されるものではなく、トルコの周辺化を助長しただけであった。トルコ国内における熟練労働力は減少し、移民の出稼ぎ収入や移民の職業技術習得を見込んだ国内産業勃興の期待に反し、それは小規模の個人単位の起業しか促さなかった。トルコの経済開発は進展せず、むしろ欧州各国のさらなる経済発展の促進に帰結したのである(Abadan-Unat et al., 1976)。

今日、欧州には270万人のトルコ国籍者が住み、1995年から2005年の間に欧州各国の市民権を獲得したトルコ人が約80万人いることから、350万人以上のトルコ人が欧州に在住すると推計される(İçduygu and Kirişçi, 2009: 6-9)。家族呼び寄せ制度と母国-欧州諸国間に形成されたトルコ人の社会的ネットワークを活用した移動

のメカニズムは、近年のトルコ人の欧州への国際移住の根幹を成していると言えよう (Böcker, 1995; 森, 2006: 97)。

4. 1970—1980年代の研究動向

4-1. 近代化と女性の「偽りの解放」

1970年から1980年代にかけてのトルコ人の国際移住をめぐる女性/ジェンダー視点の研究は、①国際移住がトルコ国内における女性の地位や役割に及ぼした影響を分析した研究 (Abadan-Unat et al., 1976; Abadan-Unat, 1977; Abadan-Unat, 1982; Kudat, 1982; Azmaz, 1984) と、②欧州におけるトルコ人女性の労働条件やそれに関連した女性の問題に着目した研究 (Mirdal, 1984; Münscher, 1984; Davis and Heyl, 1986) の、大きく2つに分類される。①は国際移住が有する女性の地位への開発的効果に対するトルコ人女性研究者の期待が反映されており、ミクロな視点で詳察が行われている。一方、②は「国連女性10年」の取り組み等に見られるように、欧州において増加する女性移民の生きる状況を「問題化」する欧州の関心の有り様が反映されている。そこで、以下では①にレビューの核を据えたい。

まず、トルコ人の国際移住研究の先駆者とされるネルミン・アバダン=ウナット (Nermin Abadan-Unat) の論考の検討から始めたい (Abadan-Unat, 1977)。この論文では60年代初期からトルコと西ドイツで行われた諸調査のデータと先行研究が用いられ、移住がトルコ人女性の解放にどのように影響したのかが考察されている。そもそも、トルコ人の欧州への国際移住は、トルコの財政的・社会的諸問題の解決、国内産業の発展、地方の開発に貢献すると期待されていた国家政策の一つであったという。そのため、国家の発展・開発の一側面としての国際移住がトルコにおける女性の地位や解放にどのように影響したかが研究の焦点として問われることとなった (Abadan-Unat, 1977)。

アバダン=ウナットは、「どんな種類の解放も近代化の過程と密接に関係している」と述べ、近代化の過程で産業化・都市化・移住が継起するという理論に基づき、トルコ人の欧州諸国の都市における移住労働がトルコの近代化を促進し、トルコ人女性の「解放」につながると仮定した (Abadan-Unat, 1977: 35-37)。その仮定の実証方法は次のようなものである。まず、西ドイツに単独でまたは夫と共に移住した既婚女性と、夫のみが移住してトルコに残された既婚女性の2グループを対象に据えた。そして、近代化による社会構造的変化 (核家族化など) を中心とする解放指標について聞き取り調査を行い、両者を比較考察した。その結果を要約すると次のようになる (Abadan-Unat, 1977: 37-54)⁴。

前者の場合、女性移住労働者はドイツで賃金労働に従事したことで、経済的解放を得た。しかし、女性が従事したのは職業技術を向上させる類の労働ではなく、また、ドイツでの就労経験を生かせる産業がトルコでは少なく、かつ女性を雇用しなかったため、帰国後の女性の就労機会は皆無に等しかった。したがって、移住先で女性達が享受した経済的解放は、母国における彼女達の経済的・社会的解放を促すことはなかったという (Abadan-Unat, 1977: 45)。

後者の場合、夫が不在の間は、妻の労働領域が家庭外にも拡大したが (銀行や行政機関における諸手続き等)、それは必ずしも賃金労働への従事には結びつかなかった。また、妻は夫からの送金の使途や農地の利用に関して彼女自身の判断で決められる自由を得た。しかし、移民を送り出す家族は、移住労働の成功を示すことによって地域内での地位と名誉を得る必要があり、送金は高価な物品購入に使用された。そして、生活様式や家族内のジェンダーや世代の秩序に関する認識及び現実的変化、つまりアバダン=ウナットの含意する女性の本当の「解放」を生むまでには至らなかったと考察されている (Abadan-Unat, 1977: 53)。

一方、両者に共通して、幼少時からの男女の教育機会の均等な確保が重要であるという認識が、労働領域の拡大に伴って女性達の間を広まったことが指摘された。

上記の考察から、アバダン=ウナットは、近代性の獲得にとって、「都市性」⁵は直接的な要因ではなく、「社会経済的獲得」こそが重要であると述べ、「近代化の一部としての移住は」女性の解放を促進もしたが、購買力の拡大を誇示するための消費という「偽りの解放」も生んだと結論づけた (Abadan-Unat, 1977: 55)⁶。

アバダン=ウナットの研究枠組は、トルコ人女性が「解放」されるべき存在であるという認識、そして、近代

化と解放の連動性、欧州諸国の都市における賃金労働の従事が女性の「解放」を促進するというような事象間の関係が想定されることによって成立している。裏返せば、このことは、近代化が達成された「先進的」地域である欧州における男女間の社会的関係は平等である一方、いまだ近代化されざる「後進的」オリエントの一国家であるトルコにおける男女間の社会的関係は不平等であるという、オリエンタリズムの思考が彼女の認識の根幹にあることを示している。そして、「先進的」世界との邂逅とその模倣によって、「後進的」世界は男女間の平等な社会的関係を獲得し近代化を達成するという進歩主義の論理が研究枠組の基盤にあることが透けて見える。従って、アバダン＝ウナットの論考には欧州のトルコに対する植民地主義的まなざしが反映していることが伺われる。また、彼女は論文中で「解放」概念の定義を全く怠っていることも、植民地主義的まなざしの延長線上にある研究姿勢として批判されよう⁷。本来は、「解放」に相当する女性当事者達の民俗概念と意識のあり方を彼女達の表現に基づいて入念に解釈すべきであり、その点にこそ、女性達の「生きかた」が看取されるはずである。

4-2. 資本主義下における労働者運動と女性の「解放」

上記①に分類されるが、アバダン＝ウナットとは異なる立場からの論文に、社会主義フェミニズムに立脚したアイシェ・クダット (Ayşe Kudat) の論考がある (Kudat, 1982)。本論文は著者自身による民族誌的調査や統計資料等を用い、西ドイツにおけるトルコ人女性労働者の労働経験が彼女達自身、家族、そしてトルコ社会に与えた影響を考察したものである。

クダットは、近代化した欧州をトルコの模範とみなしたアバダン＝ウナットとは対照的に、トルコと欧州は、女性の社会的地位の低さという点で差異がないと主張する。なぜなら、彼女はその原因を、トルコと欧州が採用する資本主義制度に見出しているからである (Kudat, 1982: 293)。彼女は女性の移住労働を研究対象にした目的をそもそも明記していないので推測になるが、欧州への移住が女性の地位の改善に直接に貢献するわけではないことを認識しつつ、それでも女性が獲得するもの、それが社会に及ぼす影響は研究の対象に値すると考えられたものと思われる (Kudat, 1982: 293-295)。

クダットは異なる背景のもとに単身で渡独した4人の女性のライフ・ストーリーを事例とし、次のように考察している。トルコ人女性労働者は、国際移住労働を階級上昇と社会的抑圧から自由になる機会と捉え、それを実行に移すにあたりイニシアティブと独立心を見せていた。国際移住は在独トルコ人女性労働者達をトルコの地域社会の人間関係から物理的に離れたため、彼女達は「社会的コントロールのメカニズムから」解放された。また、彼女達は、ドイツ及びトルコにおいて家族内での地位を向上させ、貯蓄・消費に関して発言権を増していった (Kudat, 1982: 294-295, 297-299)。そうした一方で、不安定な雇用、敵対的な環境、独語でのコミュニケーション能力の低さ、恥の意識のために彼女達においては、労働者の権利の自覚といった政治的意識の出現が妨げられ、帰国後は、トルコ社会に適応するために彼女達個々人が西ドイツで身に付けた振る舞いや新しい技術は抑圧されねばならず、また雇用機会がなかったため労働者運動に参加することもなかった (Kudat, 1982: 294, 304-305)。

したがって、トルコ人女性は海外での移住労働によって「解放されること」を目指したが、それは、個人、家族レベルに留まったと結論づけられている。クダットは、女性の抑圧を資本主義体制に由来するものと認識し、その根本的な解放手段を社会主義体制への転換に求めていた。しかし、移住労働の経験がある女性による労働者運動がトルコにおいて盛り上がりを見せなかったことから、トルコ人女性の移住労働経験はトルコ社会に変化をもたらさなかったと評価された (Kudat, 1982: 304-305)。

本論文は、トルコ人女性の海外における賃金労働への従事がもたらす私的領域への影響が事例を挙げて丁寧に描写され、考察されている点で資料的価値が高い。しかし、社会主義体制への移行によって女性問題が解決するとする単線的で紋切り型の理解のために、個々の女性の海外労働経験の記述の豊かさに反して、結論が狭小なものとなっていることは否めない。

5. 1990年－2000年代の研究動向

5-1. ジェンダー概念の採用

1990年代に入ると、遅まきながら、トルコ人の国際移住研究にジェンダーの視点を取り入れられるようになって

た。1990年代は、トルコ人女性移民のトルコ社会への再統合過程の研究、移民女性の出生率に注目した研究など新しい研究テーマが認められる一方で (Wolbert, 1996; Schoenmaeckers, Lodewijckx and Gadeyne, 1999)、国際移住がトルコ母社会の女性に与える影響など、70年代から継続するテーマも見られる (Kadioglu, 1997; Day and İçduygu 1997;)。しかし、1990年代の分析枠組は、1970年代から80年代のそれとは大きく異なっている。例えば、アイシェ・カドゥオール (Ayşe Kadioglu) は、ジェンダー役割の維持/変化の観点から、国際移住の社会的影響にアプローチした (Kadioglu, 1997)。また、リンカーン・デイとアフメット・イチドゥイグ (Lincoln Day and Ahmet İçduygu) は、トルコ社会特有の価値体系を反映するジェンダー指標 (スカーフの着用⁸、独身女性の一人暮らしに賛成するか等) を用いて、女性の地位を定量的に分析する手法の開発を試みた (Day and İçduygu 1997)。異なる手法を用いた両研究が、国際移住はトルコ母社会の変化 (ジェンダー役割の境界の揺らぎ、女性の地位向上) を誘発する要因となっていないという共通の結論に到達したことは注目に値する。

ここでは、特に上記のカドゥオールの論考の特徴について検討したい。カドゥオールは、旧来のトルコ人の国際移住研究における3つの等式 (トルコ=伝統、欧州=近代、女性の解放=欧州との接触及び賃金労働への従事) が「植民地主義的」であり、この枠組を無批判に援用することは、欧州の労働市場における性・民族・人種をめぐる差別を容認することに等しいと指摘する。そして、彼女はこうした予見の再生産を回避するために、質問票による構造的な面接調査に基づく分析を通じて、国際移住がジェンダー役割に与える諸影響を析出することとした (Kadioglu, 1997: 540-544)。

その結果、以下の諸点が明らかになった (Kadioglu, 1997: 551-553)。まず、既婚女性の国際移住経験は、当該女性の出身地、婚姻後の家族形態 (核家族/拡大家族)、結婚の形式 (お見合い/恋愛)、信仰 (スンニ派/アレヴィー派)⁹、教育歴の5要素の影響を強く受けて差異化・多様化することが判明した。それゆえ、トルコ人女性を単純に「伝統」に埋没した存在として一括りにすることの無意味さも浮き彫りにされる。

次いで、国際移住が「伝統的」な社会出身の女性に及ぼす影響を全て肯定的なものとして一元的に仮定することの誤りが明らかにされた。夫と共に海外移住した妻で、夫の管理下にあり続けたために、旧来のジェンダー役割の範疇を越えた振る舞い (夫の意見に反した行動をする等) が可能とならなかった妻もいれば、母社会に残った妻が、夫の不在時に旧来のジェンダー役割の範疇を越えて行動する機会を得た場合もあった。

以上のような女性達の経験の多様性を根拠に、カドゥオールは「国際移住の経験が女性達に経済的保障をもたらした」という議論は可能だが、同時に、女性達が支払った「代償」の大きさを的確に認識する必要があると結論する (Kadioglu, 1997: 553)。そして、個別経験の差異に関わらず、大半の女性が「公的役割と私的役割を果たすという二重の負担を背負」ってしまったゆえに、国際移住は「[旧来の] 世帯内の [性別] 分業に取って代わる何かを生み出しはしなかった」という言葉を以て論考を閉じている (Kadioglu, 1997: 553)。ジェンダー視点を最初期に援用し、差異と多様性に配慮しながら、国際移住と女性達の経験のあり方を分析したカドゥオールの仕事は、それ以降の当該分野の研究に重要な範を提供したと評して過言ではないだろう。

5-2. ジェンダー、トランスナショナリズム

2000年代になると、トルコの国際移住研究は、送金・社会保障・経済開発を論点とする経済研究 (Koç and Onan, 2004; Escobar, Hailborner, Martin and Meza, 2006) や移民による多文化状況の出現を論点とする文化研究 (Çaglar, 2010) などが隆盛を見せ、トルコ母社会の女性達の経験やジェンダー規範に対する国際移住の影響を論点とする研究は鳴りを潜めてしまう。この動向は、1990年代のカドゥオールらの信頼できる研究により、国際移住がトルコ母社会の女性の地位向上やジェンダー役割の変化に影響を及ぼさないことが「実証」されたことの余波として理解できよう。そして、国際移住をめぐる女性/ジェンダー研究は移民先ホスト国におけるトルコ人移民を対象の重点を移していく (Erel, 2002; Crul and Doomernik, 2003; Eck, 2003)。

このような国際移住研究における移行を反映した代表的な研究に、クリスティアン・ティーママン (Christiane Timmerman) の論考がある (Timmerman, 2006)。彼女はトランスナショナルな社会文化状況の捕捉を前提に、トルコ母社会と移住先のベルギーで実施した参与観察と面接調査の成果を柱に据えて、ジェンダー役割が国際移住過程を構造化するメカニズムを解明しようとした。

1962年のトルコとベルギーの二国間協定の停止以後、ベルギーへの合法的な定住・就労手段は家族の呼び寄せと結婚による移住のみとなった（Timmerman, 2006: 127-128）。ティーママンの述べているところを要約すれば、結婚移住が頻発化する要因は、第一に在トルコ・トルコ人にベルギーへの移住希望があること、第二に、第一世代のみならず第二世代の在ベルギー・トルコ人にも結婚相手を母国から望む人が多いこと、第三に、在欧州トルコ人と在トルコ・トルコ人の間に形成されたトランスナショナルなコミュニティ¹⁰が両国在住者間での社会的・文化的な価値の共有・伝達・交流を可能にしていることである（Timmerman, 2006: 126-128）。

在トルコ・トルコ人が、在ベルギー・トルコ人との結婚を望む背景には、社会経済的地位の向上と「近代的」生活の獲得がある。女性にとって、欧州は「自由」な世界であると夢想されており、そこで「解放されること」も期待されている（Timmerman, 2006: 133）。

一方、在ベルギー・トルコ人が在トルコ・トルコ人との結婚を望む背景には、在ベルギー・トルコ人が抱くトルコ民族アイデンティティの希求（ケマリズム支持者、イスラーム主義者双方）、イスラーム主義への傾倒、高学歴女性によるイスラームのフェミニスト解釈に依拠した男女平等の要求があることが指摘されている¹¹。在ベルギー・トルコ人の中では、ベルギー育ちの若いトルコ人男性は「道を誤った」存在として、同じく女性は「解放されすぎた」存在としてステレオタイプ化されている。それに対して、トルコで育ったトルコ人は「真正な文化」を保ち、特に女性は「伝統的」で「従順」であるとされ、配偶者として望ましい存在と考えられている。それに加えて、在ベルギー・トルコ人女性にとって、夫となる男性1人のみを呼び寄せる結婚移住は、夫の両親との同居を避けて自由を享受できるなど、実際的なメリットが多いとも考えられている（Timmerman, 2006: 129-132, 134-135）。

しかしながら、在ベルギー・トルコ人と在トルコ・トルコ人との結婚移住に対する期待のあり方のズレが、必然的に不幸な結果をもたらしている。結婚移住でトルコからきた男性の場合、期待通りに就職できないことは、ベルギー社会からの疎外を感じる一因となっている。それに加えて日常生活や経済面で妻に依存する状態は、彼らの男性性の喪失を意味するため、世帯内に緊張が生まれている（Timmerman, 2006: 134）。また、結婚移住でトルコからきた女性の場合、期待していたような「解放」を達成できず、逆に夫の家族に完全に依存せざるを得ないことが多く、場合によっては虐待を受けることもある（Timmerman, 2006: 136-138）。

ティーママンの研究を通じて、トルコ人移住者各個人が依拠するトルコ民族アイデンティティと社会＝文化的参照枠組（イスラーム主義、ケマリズム）に応じて、異なるジェンダー役割が喚起され、そのジェンダー役割が彼ないし彼女の国際移住過程を構造化することが明らかにされた。また、その構造化作用の基盤を提供しているのが、トランスナショナルなコミュニティであることも明らかにされた。

ティーママンの分析視点は斬新であるものの、社会＝文化的参照枠組、ジェンダー役割及び結婚移住に対する期待との間の対応性を明確に示せていないため、分析自体は印象論に陥っている。しかし、トルコの社会＝文化的参照枠組の多様さを国際移住過程の分析に用いるのは、トルコ人の国際移住をステレオタイプ的に解釈する弊害を避け、その複雑なメカニズムを捉えるために極めて有効な手段であることは間違いない。

また、ティーママンの論考では、トルコ人女性の社会的状況の変化や欲求・期待の心情を説明する際に「解放される」という表現が用いられ、「イスラーム主義組織との活発な関わりは移民女性に対して非直接的な解放効果をもたらすだろう」などとも論じられている（Timmerman, 2006: 131）。カドゥオールによるオリエンタリズム批判（Kadioglu, 1997）が一般に了解された現今にあっても、いまだに「解放される」という概念が無批判に使われていた点に、中東出身女性に対するまなざしの背景に根深いオリエンタリズムが存在することを指摘できよう。

6. おわりに

過去40年間にわたるトルコ人の国際移住をめぐる主要な女性／ジェンダー研究について、その研究対象、分析枠組、視点の変化、貢献点を見てきた。1970年代から1980年代にかけては、トルコ国家や社会の近代化、開発といった視点から国際移住の女性への影響を分析・考察する研究が顕著であった。1990年代は先行研究に潜む「内面化されたオリエンタリズム」から脱し、トルコ人女性やトルコ社会のジェンダー役割の現状を実証的に捕

捉する試みがなされた。また、この時期の論文では、ジェンダーという用語が用いられてはいるものの、研究対象は依然として女性とその役割に限定されていた。2000年代に入って、ようやく、ジェンダーが女性の代替用語ではなくなり、ジェンダー概念は人の主体形成からトランスナショナルな諸現象に至るまでを組織化する関係性の力学として、国際移住研究の主要な分析視点の地位を得た。そうした女性研究からジェンダー研究への移行が見られる一方で、オリエンタリズムの根強さも否定しがたく看取された。このような研究対象、分析枠組、視点の変化は、女性／ジェンダー研究の一般的／世界的動向に沿うものであるだけでなく、トルコに近代化をもたらすと期待されたトルコ人の国際移住労働が、期待通りの成果を生まず、欧州における移民「問題」に変化していった歴史的経緯とも併行していることを確認しておきたい。

今後のトルコ人の国際移住をめぐるジェンダー研究では、カドゥオールやティーママンらの研究の良質な部分に倣いながら、ジェンダーに加えて、政治的意識、宗教、エスニシティなど複数の差異化の変数を視野に入れ、さらに「内面化されたオリエンタリズム」を排した分析が、国際移住をめぐる諸現象の様態と構造を実証的に解明していく上で欠かせないであろう。

註

- 1 トルコ人の国際移住研究についてはドイツ語、トルコ語の専攻文献があるが、本稿ではこれらの言語の専攻研究においても引用頻度が高く、影響力の大きい英語文献を中心的な検討対象としている。
- 2 1964年オーストリア、1966年フランス、1967年スウェーデンなど順次に二国間協定が結ばれた。
- 3 1979年にアンカラ大学の学生であったアブドゥッラー・オジャランによって結成されたマルクス・レーニン主義を信奉し、クルド人のトルコにおける独立を要求する武装組織。
- 4 アバダン＝ウナットが用いた解放指標は、①拡大家族関係の減少、②核家族役割パターンの適応、③家族構造の断片化、④賃金収入生産過程への参入、⑤増加するマスメディアの影響、⑥宗教的実践の減少、⑦教育に関する男児と女児の機会平等に対する考えの増加、⑧消費志向の振る舞いと規範の採用 (Abadan-Unat, 1977: 36-37)。
- 5 ここでの「都市性」とは、家族内、家族間に影響を与える都市という環境 (社会環境や社会的コントロール、社会と家族の関係の開始とその強化、家族のメンバーに対する経済的依存度の低下、異なる定住パターン、新しいサービスやコミュニケーションの仕方) のことを指す (Abadan-Unat, 1977: 36)。
- 6 アバダン＝ウナットの「社会的経済的獲得」は、アラン・シュナイバーグ (Allan Schnaiberg) の概念規定に従っている (Schnaiberg 1971)。シュナイバーグは、彼の論考で近代性にとって重要なのは都市性ではなく社会的経済的獲得であると述べたのだが、アバダン＝ウナットはそれを批判的検討なしに彼女の論文の導入と結論で引用している。結果として彼女の論考は、彼の近代性理論を補強する種類のものとなっている (Abadan-Unat, 1977: 35-36, 55)。
- 7 それを補うかのように、1982年の論文では、「解放」が「個人の独立と自己実現を妨げる社会的抑圧からの解放」と定義されており、その実現のために「家族内における役割の拡大再分配、役割の共有が必要であり…また、生産、権力構造、社会的規範、価値判断と関連する諸構造の相互関係を把握する必要がある」と、より具体的な結論に至っている (Abadan-Unat, 1982: 233)。
- 8 日本語ではイスラームを信仰する女性が頭を覆うことを、スカーフを巻くなどと言う。しかし、現代のトルコ社会では女性が頭を覆うことは、必ずしもイスラーム信仰と直結しない。また、日本語の一般的な意味でのスカーフは、トルコ語でエシャルプ (eşarp) と言われ、イスラームを信仰する女性が頭を覆うために使う布はトルバン (türban) やバシュオルトゥ (başörtü) と呼ばれる。エシャルプとトルバン及びバシュオルトゥは意味合いが異なるので区別が必要である。
- 9 トルコにおけるイスラーム信仰には、大きく分けてスンニ派とアレヴィー派があり、スンニ派が多数派。スンニ派は保守的で男女間の隔離が厳格である一方で、アレヴィー派はより進歩的で男女間の隔離が緩やかであると言われる。
- 10 ここで言うトランスナショナルなコミュニティとは、移住先の諸社会及び母社会に住む親族、故郷の友人らの紐帯を基盤に、複数の国家間の国境をまたぐ形で成るコミュニティのことである。
- 11 ケマリズム (Kemalism) とはトルコ共和国建国の父と言われるムスタファ・ケマル・アタトルクらが掲げた六つの原理 (世俗主義、国民主義、革命主義、共和主義、人民主義、国家革命主義) によって成る共和国の指導理念 (粕谷, 2003: 64; 新井, 2001: 211-213)。ティーママンは、彼女の論考でケマリズムの世俗主義に着目している。彼女は、ケマリズムの世俗主義は、国家による宗教の管理であるとし、具体的には公的領域において男女平等が推進されても、私的領域においてイスラーム的価値、つまり家長長制と男女隔離が信奉されると解釈している (Timmerman, 2006: 129)。イスラーム主義とは、ここでは1980年代以降の欧州のトルコ人コミュニティで見られるイスラームを私的領域だけでなく公的領域にも広げようとする思想及び運動を指し、ティーママンは、彼女の論考でイスラーム主義が、伝統的な家族的価値に基づいた社会の設立を求める主張に注目している (小松, 2003: 1-3, 22-25; Timmerman, 2006: 129)。

参考・引用文献

- Abadan-Unat, Nermin[1976] 'Turkish Migration to Europe (1960-1975) : A Balance Sheet of Achievements and Failures'. In Nermin Abadan-Unat and Contributors (eds.), *Turkish Workers in Europe 1960-1975: A Socio-Economic Reappraisal*, Leiden, Netherlands: E.J. Brill, pp.1-44.
-[1977] 'Implications of Migration on Emancipation and Pseudo-Emancipation of Turkish Women', *International Migration Review*, 11(1), pp.31-57. (トルコ語: 'Dış Göç Akımının Türk Kadının Özgürleşme ve Sözde Özgürleşme Sürecine Etkisi', *Amme İdaresi Dergisi*, Cilt: 10. Sayı 1-55, s.106-132, Ankara, 1977)
-[1982] 'The Effect of International Labor Migration on Women's Roles: The Turkish Case'. In Çiğdem Kâğıtçıbaşı with the assistance of Diane Sunar (eds.), *Sex Roles, Family, & Community in Turkey*, Indiana: Indiana University Turkish Studies 3, pp.207-236.
-[1995] 'Turkish Migration to Europe'. In Robin Cohen (ed.), *The Cambridge Survey of World Migration*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.279-284.
- Abadan-Unat, Nermin, Ruşen Kales, Rinus Penninx, Herman Van Renselaar, Leo Van Velsen, Leylâ Yenisey (eds.) [1986] *Migration and Development: A Study of the Effects of International Labor Migration on Boğazlıyan District*, Ankara: Ajans-Türk Press.
- Azmaz, Advıye[1984] *Migration and Reintegration in Rural Turkey: The Role of Women behind*, Göttingen: Edition Herodot.
- Böcker, Anita¹[1995] 'Migration Networks: Turkish Migration to Western Europe'. In Rob van der Erf and Lisbeth Heering (eds.), *Causes of International Migration*, Luxembourg: Office for Official Publications of the European Communities, pp.151-171
- Crul, Maurice and Doornik, Jeroen[2003] 'The Turkish and Second Generation in the Netherlands: Divergent Trends between and Polarization within the Two Groups', *International Migration Review*, 37(4), pp.1039-1064.
- Çağlar, Ayşe [2010] 'Rescaling Cities, cultural diversity and transnationalism: Migrants of Mardin and Essen'. In Vertovec Steven (ed.), *Anthropology of Migration and Multiculturalism: New Directions*. Oxon: Routledge, pp.113-138.
- Day, H. Lincoln and İcduygu, Ahmet[1997] 'The Consequences of International Migration for the Status of Women: A Turkish Study', *International Migration*, 35(3), pp.337-371.
- Davis, F. James and Heyl, S. Barbara[1986] 'Turkish Women and Guestworker Migration to West Germany'. In Rita J.Simon and Caroline B. Brettel (eds.), *International Migration: The Female Experience*, New Jersey: Rowman and Allanheld, pp.178-196.
- Eck, Van, Clementine[2003] *Purified by Blood: Honour Killings Amongst Turks in the Netherlands*, Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Erel, Umut[2002] 'Reconceptualizing Motherhood: Experiences of Migrant Women from Turkey Living in Germany'. In Deborah Bryceson and Ulla Vuorela (eds.), *The Transnational Family New European Frontiers and Global Networks*, Oxford: Berg, pp.127-146.
- Escobar, Augtin, Hailboronner, Kay, Martin, Philip and Meza, Liliana[2006] 'Migration and Development: Mexico and Turkey', *International Migration Review*, 40(3), pp.707-718.
- Hune, Shirley[1991] 'Migrant Women in the Context of the International Convention on the Protection of the Rights of all Migrant Workers and Members of Their Families', *International Migration Review*, 25(4), pp.800-817.
- İcduygu, Ahmet and Kirişçi, Kemal[2009] 'Introduction: Turkey's International Migration in Transition'. In Ahmet İcduygu and Kemal Kirişçi (eds.), *Land of Diverse Migrations: Challenges of Emigration and Immigration in Turkey*, Istanbul: Istanbul Bilgi University Press, pp1-25.
- Kadioğlu, Ayşe[1997] 'Migration Experiences of Turkish Women: Notes from a Researcher's Diary', *International Migration*, 35(4), Oxford: Blackwell Publishers Ltd, pp.537-556.
- Koç, İsmet and Onan, İsil[2004] 'International Migrants' Remittances and Welfare Status of the Left-Behind Families in Turkey', *International Migration Review*, 38(1), pp.78-112.
- Kudat, Ayşe[1982] 'Personal, Familial and Societal Impacts of Turkish Women's Migration to Europe'. In UNESCO, *Living in Two Cultures: The Socio-Cultural Situation of Migrant Workers and their Families*, The Unesco Press, pp.291-305. (トルコ語: Gürel, Seval ve Kudat, Ayşe[1978] 'Türk Kadınının Avrupa'ya Göçünün Kişilik, Aile ve Topluma Yansıyan Sonuçları', *Ankara Üniversitesi Siyasal Bilgiler Fakültesi Dergisi*, Cilt. XXXIII, Sayı.3-4, Ankara, s.109-134.)
- Mahler, J. Sarah and Pessar, R. Patricia[2006] 'Gender Matters: Ethnographers Bring Gender from the Periphery toward the Core of Migration Studies', *International Migration Review*, 40(1), pp.27-63.
- Martin, L. Philip[1991] *The Unfinished Story: Turkish Labour Migration to Western Europe with Special Reference to the Federal*

- Republic of Germany*, Geneva: International Labour Office.
- Mirdal, G. M.[1984] 'Stress and Distress in Migration: Problems and Resources of Turkish Women in Denmark', *International Migration Review*, 18(4), pp.984-1003.
- Münscher, Alice[1984] 'The Workday Routines of Turkish Women in Federal Republic of Germany: Results of a Pilot Study', *International Migration Review*, 18(4), pp.1230-1246.
- Schnaiberg, Allan[1971] 'The Modernizing Impact of Urbanization: A Causal Analysis', *Economic Development and Cultural Change*, 101.
- Timmerman, Christiane[2006] 'Gender Dynamics in the Context of Turkish Marriage Migration: The Case of Belgium', *Turkish Studies*, 7(1), pp.125-143.
- Vertovec, Steven[2010] 'Introduction'. In Steven Vertovec (ed.), *Anthropology of Migration and Multiculturalism: New Directions*. London: Routledge, pp.1-17.
- Wolbert, Barbara[1996] 'The Reception Day- A Key to Migrant's Reintegration'. In G. Rasuly-Paleczek (ed.), *Turkish Families in Transition*. Frankfurt am Main: Peter Lang, pp.186-215.
- 新井政美『トルコ近現代史—イスラーム国家から国民国家へ』みすず書房、2001年
- 小ヶ谷千穂「国際移動とジェンダー—フィリピンの事例から—」、宇田川妙子・中谷文美編『ジェンダー人類学を読む』世界思想社、2006年、240-259頁
- 粕谷元「トルコのイスラーム潮流—ヌルスィーとギュレン」、小松久男・小杉泰編『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会、2003年、63-83頁
- 小松久男「激動の時代」、小松久男・小杉黎編『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会、2003年、1-36頁
- サイド、W・エドワード『オリエンタリズム』（今沢紀子訳）平凡社、1986年
- 中山紀子「世俗主義・イスラーム・女性—トルコ」、宇田川妙子・中谷文美編『ジェンダー人類学を読む』世界思想社、2006年、97-119頁
- 森明子「家族の再編と現代都市—ベルリンのトルコ移民二世代をめぐって—」、森明子編『ヨーロッパ人類学—近代再編の現場から』新曜社、2004年、86-107頁